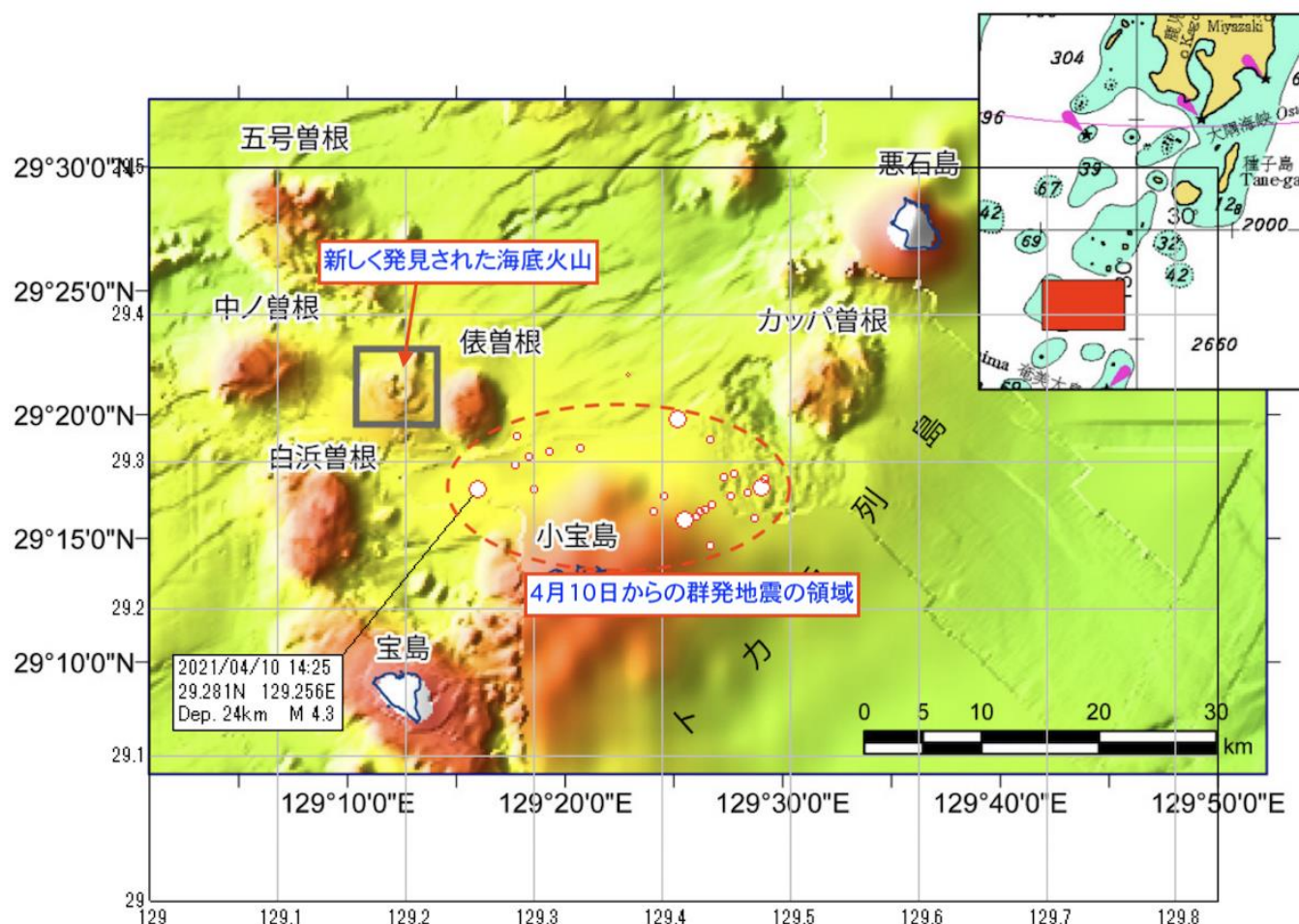


九州南西沖、トカラ列島で群発地震

4月10日、トカラ列島近海でかなり活発な群発地震活動が開始しました。10日だけでも379個の地震が発生し、最大マグニチュードは5.3でした(暫定値)。

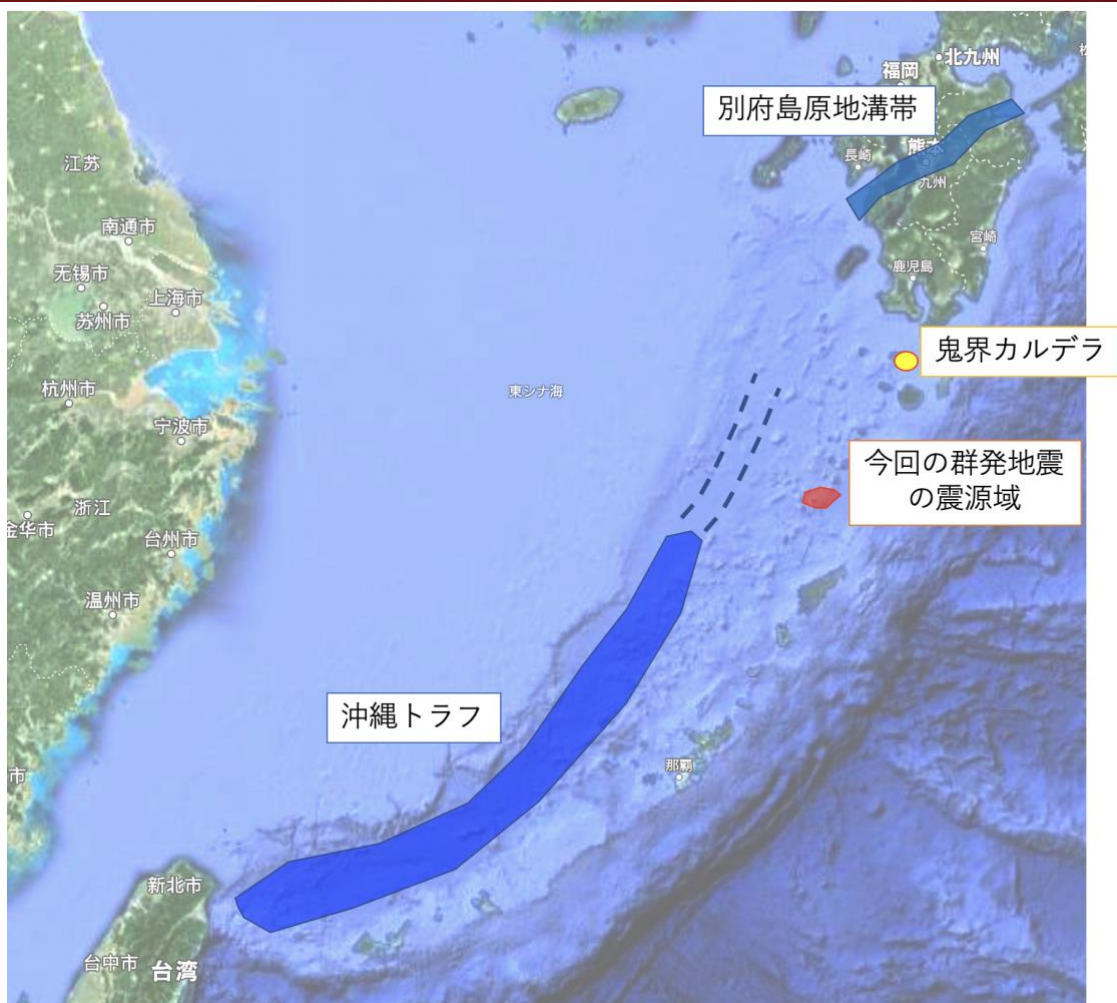
現時点では今後、この群発地震活動がどのように推移するかについて、断定的な事を言える状況ではありません。ただ、この近くには海上保安庁により、近年、これまで知られていなかった海底火山も発見されており、火山活動との関連も頭の片隅に置いておく事が必要と考えます。次にお示しする図は、海上保安庁が発見した新しい海底火山と今回の群発地震活動との位置関係です。海上保安庁が発表した海底地形図に震源分布を重ねています。



海上保安庁の海底地形図と今回の群発地震の震源地

九州南西の海域には沖縄トラフという深い地形(トラフとは海溝までは深くない、凹んだ地形の意。南海トラフも海溝ほどは深くないが凹地となっており、南海”海溝”と呼んでも間違いではない)があり、ここでは熱水噴出孔や深海の生物群も見つかっており、テクトニックに非常に活発な地域となっています。

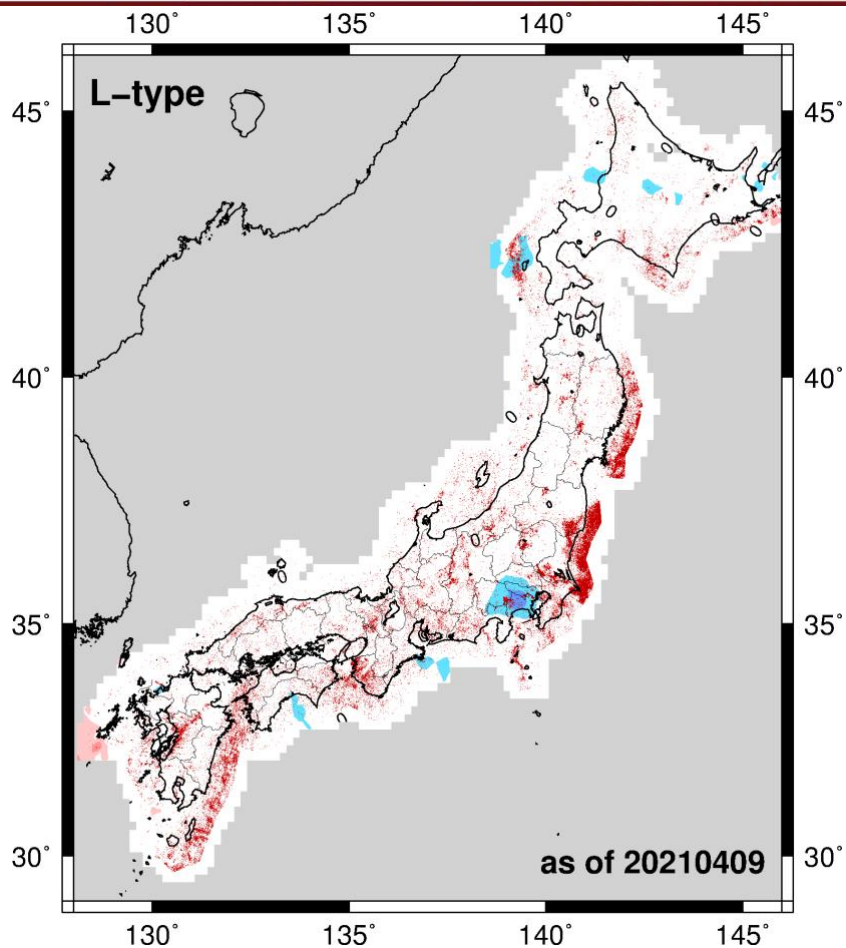
沖縄トラフは九州の別府島原地溝帯へとつながる大構造ですが、北部ではまだ熱水噴出孔は見つかっていないようです(次ページ図中の点線の領域)。またこの地域には今からおよそ7,300年前に破局噴火と呼ばれる大噴火を起こした鬼界カルデラが存在します。この破局噴火により、当時南九州に栄えていた縄文文化は完全に滅んでしまいました。さらに鹿児島湾自体が始良カルデラという巨大カルデラで、およそ3万年前に破局噴火を引き起こしています。



日本列島陸域の地下天気図®

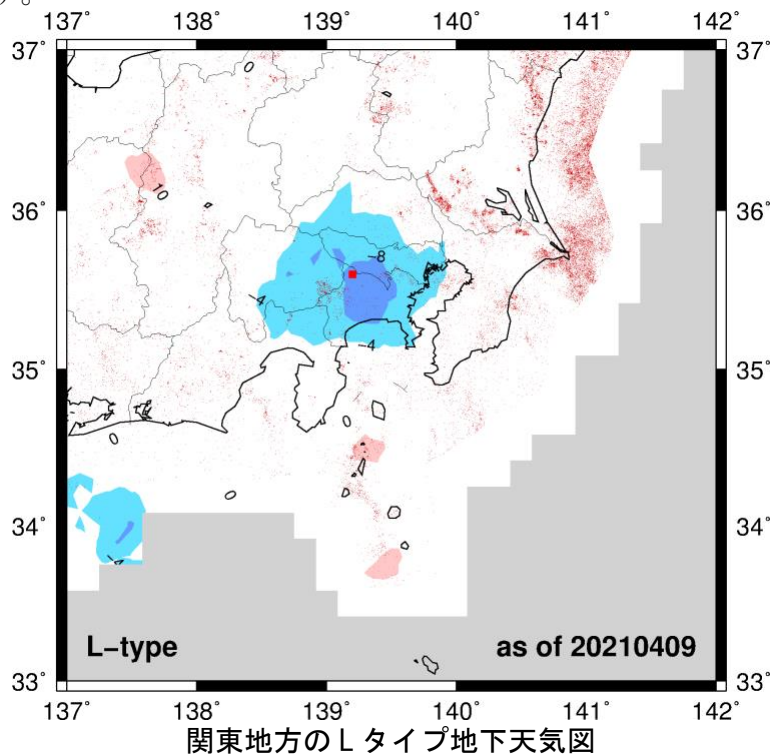
3月1日のニュースレターに引き続き、日本列島の陸域に特化した地下天気図解析です。今週は4月9日時点のLタイプ地下天気図をお示しします。この地下天気図解析では対象マグニチュード M6 から M7程度の地震と考えています。

基本的なパターンは3月1日に報告させて頂いたものと変化はありません。南関東に広がる地震活動静穏化領域が最も気になる静穏化である事は変わりありません。今回の解析でも関東地方の静穏化はまだ進行中であると判断できます。次のページに全国の陸域のLタイプ地下天気図をお示しします。



4月9日時点のLタイプ地下天気図

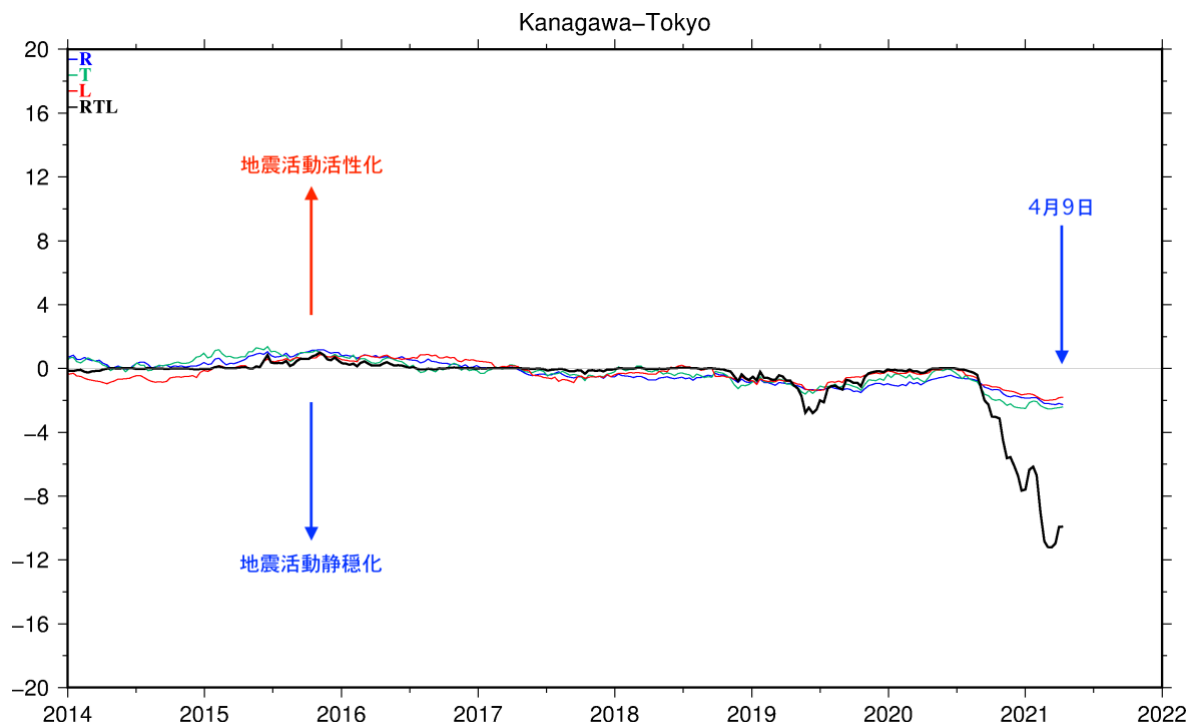
次にお示しする図は関東地方の拡大図です。神奈川県を中心とした地震活動静穏化の異常が継続しているのがわかります。



関東地方のLタイプ地下天気図



次にお示しするグラフは前ページの地下天気図で■で示した地点(神奈川―東京の境界)の時間変化グラフです。



3月の段階からわずかに変化が見られますが、大局的には静穏化が継続中という判断に変化はありません。

経験的にはこの静穏化が終了してから地震が発生するケースが多いですが、2018年6月の大阪北部地震のように、静穏化の最中に地震が発生する事もあります。

今、確実に言えるのは、東日本大震災以降、南関東で初めての顕著な地震活動静穏化現象が現在進行中であるという事です。